

# 日本語学習者の名詞修飾における 過剰な「の」について

浅 山 佳 郎

## Abstract

This paper deals with the problem of excessive “no” insertions in noun modification structures of Japanese learners’ speech. Previous studies have focused on the excession of “no” as a transfer from the native language or as a quasi-substantive particle. This paper agrees with Murasugi (1991)’s interpretation of the excessive insertion of “no” in children’s acquisition of Japanese as a complementizer phrase head and shows that this is also true for adult learners of Japanese, based on corpus data. In conclusion, I argue that the excessive use of “no” is used to stabilize the unstable tense of the conjugated form of Japanese verbs, so called “Rentai-form”. In addition, I also argue that “no” is used to neutralize the force function in the relative clause, which can be understood as having a similar force to the main clause.

## 1 問題の所在

日本語学習者の発話における名詞修飾（連体修飾）構造の末尾には、以下のような過剰な「の」が出現することがある。

（１） 私が作るの料理はまずいです。

この「の」の過剰挿入という問題については、奥野（2001）および奥野（2005）が転移および学習ストラテジーの問題として詳細な検討を加えている。また迫田（1999）および迫田（2002）でも「の」の過剰使用が学習者の母語によって異なることが指摘されている。ところでそもそも、「転移」という概念は言語教育と言語学習における現象の指摘であり、言語を生成する文法メカニズムに関する議論ではない。学習者の母語の構造と学習対象言語発話の構造とに相関が認められる可能性は十分にありうる。しかしそれはあくまで相関関係の存在という現象を指摘するものであり、言語を生成するメカニズムの解明とは言えない。学習の過程についての分析としては「転移」という概念は有効であろうが、本稿がもくろむのは、言語学習を資料としてヒトの言語生成のメカニズムの一端を明らかにすることであり、「転移」という概念があくまで学習のあり様を解明するためのものであるとするなら、それとは異なるアプローチが必要となる。

中国語学習者に関する先行研究を整理した毛瑩（2011）は、名詞修飾構造末尾の「の」の解釈を母語転移説と非母語転移説に分けているが、そこでも中国語の構造助詞「的」の「の」への転移という分析については、やはり日本語教師の経験的な判断である傾向が強く、文法的議論とはなっていないように見受けられる。また非母語転移についても、転移が認め難いという消極的な議論はあっても、「の」の過剰挿入を説明する積極的な議論には至っていない。

小山（2006）は、「の」の過剰挿入に対して、「準体助詞仮説」を提示してコーパスデータをもとにその検討を行っている。そこでは準体助詞の習得段階より名詞修飾節での「の」の過剰挿入が先行するといった根拠をもとに当該仮説が否定され、迫田（2002）の提案する「ユニット形成のストラテジー」による説明が試みられている。しかしこの提案も、学習方略としては説得力が高いが、言語としての文法体系の解明が志されているものではない。

このように、先行研究のほとんどは、ヒトの文法の一部としての学習者の中間言語文法における「の」の過剰使用を議論するものではなく、あくまで学習方略としての「の」の過剰使用を議論するものである。念のために付言すると、本稿は学習理論としての学習方略や転移を否定するものではない。本稿は、普遍文法の側面から「の」の過剰使用を生成するような文法メカニズムの議論が成立しうるかどうかを議論するものである、そうした面から見るとこれまでの先行研究のほとんどは、この問題をあつかっていないように思われる。

それに対し Murasugi（1991）は、第1言語習得としての幼児に見られる「の」の過剰挿入の問題をあつかうものであるが、そこでは日本語の関係節の特性として、それが時制辞句 TP（Murasugi の用語では IP）であるのに対し、幼児は英語の関係節のような補文辞句 CP としての関係節を形成するために「の」を過剰挿入するという提案がなされている。これは「の」の過剰使用を生成する文法に関する明確な説明となっており、本稿は Murasugi のこの視点を基本的に支持する。

Murasugi は、以下のように述べる。

- (2) I proposed that Japanese relative clauses are IPs, and showed that given this IP hypothesis, a difference between English and Japanese relative clauses directly follows from the ECP. Based on this conclusion, I proposed that Japanese children make the initial hypothesis that relative clauses are CPs, and lexically realize the head C as “の”. They later attain the knowledge that Japanese relative clauses are IPs, and hence, cease to generate “の” in relative clauses. It was shown finally that this hypothesis meets the learnability criterion. On the basis of positive evidence on the structure of pure complex NPs, Japanese children infer that all prenominal sentential modifiers are IPs, and in particular Japanese relative clauses are IPs. Thus, the IP hypothesis received support from the studies in syntax, learnability,

and acquisition<sup>(1)</sup>.

ここで Murasugi は、日本の子供が言語の習得上のプロセスとして、関係節の言語普遍的なありかたの1つである CP という仮説を立て、主要部 C を「の」として語彙的に実現するという分析を主張する。名詞修飾構造における過剰挿入の「の」の説明としては、転移が主張される中国語の「的」も CP であることを考え合わせると、合理的であると考えられる。本稿は Murasugi のこの分析を前提に、それが成人の日本語学習者にも適合するかどうかという問題を、どのような言語的条件において名詞修飾に C が出現するかという角度から解明することをめざすものである。

## 2 議論の前提

名詞修飾構造についての体系的な中間言語文法を議論する前に、中間言語文法体系が前提的に持つ制限について述べておく<sup>(2)</sup>。

というのは、学習者が学習途上で形成すると想定される中間言語文法には、母語話者の文法に近似した文法体系が含まれるとともに、同時にそれとは異なる学習者独自の文法が別に共存すると考えられる。そして後者の学習者独自の文法は、体系性をもつヒトの普遍文法のひとつではあるものの、学習者内部における唯一の文法体系ではない。よって記述文法が試みるような「こういう条件の場合はこういう形式となる」といった文法記述は、中間言語について言えばあくまで傾向的なものとなる。

ここで傾向的というのは、中間言語が異なる2つ（またはそれ以上）の文法体系を混在させているので、学習者独自の文法体系が適用された結果としての発話は、あくまで全データ中における一定の量に限定されるということである。いわゆる「正用」を産出する母語話者のそれに準ずる文法体系と、いわゆる「誤用」を産出する学習者独自の文法体系は、それぞれ単独で見れば固定的であり、文法体系それ自体が流動的に変化するわけではない。よってそれら2つ（またはそれ以上）の文法体系が共存する結果として、出現データは誤用を傾向的に含むのであり、学習者の産出する全データが単一の文法体系によって産出されるわけではない。

一般的に母語話者の文法は、統語的または形態的に A の場合には正用となり、B の場合には誤用となるというような明確な輪郭をもつ。たとえば本稿で問題とする名詞修飾構造について見れば、以下の (3a) のようないわゆる連体形が正用であり、(3b-c) のようなそれ以外の活用形は誤用となる。

---

(1) Murasugi, Keiko (1991) : 253-254

(2) これ以下の2つの段落の議論は、査読者の指摘に啓発されたものであり、その指摘に感謝を表したい。

- (3) a 太郎が読む／読んだ本  
 b \*太郎が読み本  
 c \*太郎が読め本

これは母語話者の文法としては明確で、基本的に違反が許容されない。この現象を解釈する文法としては、とりあえず日本語の名詞修飾構造末尾が形態的に時制を持たなければならないからである<sup>(3)</sup>。名詞修飾末尾に(3a)のように過去または非過去という形態的な時制辞の位置が確保される場合は正用となり、形態的な時制辞の位置がない場合は誤用となるということである。しかし学習者の中間言語としては、本稿で以下議論の対象とするように

- (4) a 太郎が読んだ本  
 b 太郎が読んだの本

という2つ(あるいはそれ以上)の形式が出現する。母語話者の文法では(4b)は名詞修飾構造末尾が形態的に時制辞ではないので許容されない。しかしもし(4b)のような学習者の産出を単なる「誤り」として排除するのではなく、本稿が試みるように何らかの普遍的文法体系によって合理的に生成されているとするなら、(4b)を産出する文法は(4a)には適用されないことになる。(4a)には母語話者の文法が適用されているからである。

学習者の発話においては、おそらくこのように2つの(またはそれ以上の)文法体系が機能している。もし可能であれば、どういう場合に母語話者のそれに近似した文法体系が適用され、どういう場合に学習者独自の文法体系が適用されるかということが明確になることが望まれるが、それは2つの文法体系を制御するさらに上位の何らかの認知的メカニズムであり、そういった上位メカニズムへの体系的なアプローチは、現在のところ論者には困難である。

よって当面のところ、学習者のいわゆる誤用表現を合理化する文法記述を試みて、それが母語話者に近似する文法と併存するという状況を想定することになる。その場合、(4b)のような時制辞が末尾にない名詞修飾構造を成立させる条件を記述したとしても、その条件に適合する場合にかかわらず学習者独自の文法が適用され、母語話者に近似する文法が適用されないということが保証されるわけではない。つまり理論的に(4b)のような形式を生成する条件下で(4b)のような名詞修飾構造が実際に産出されるのは、先述したようにある程度の傾向的な結果であって、かならずそうなるということにはならない。

以下本稿では学習者の産出する名詞修飾構造末尾の「の」を合理化するための文法を議論することになるが、その議論の根拠となるデータも、正否の明確なデータではなく、あくまで傾向的

---

(3) 時制の問題は第4節であらためて取り上げるが、ここではとりあえず動詞の連体形に時制があるという一般的な見解に従っておく。

なものとなる。本稿が主張するのは、データが示すような統語的または形態的現象が意味するある種の文法があり、それが機能している場合に名詞修飾構造末尾の「の」があくまで傾向的に多くなるということであることを、以下の論述の前提として断っておきたい。

### 3 使用データ

本稿の議論で使用するのは、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション『中納言』で公開されている『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』である<sup>(4)</sup>。I-JAS で公開されているデータのうち「第一次データ、第三次データ、第四次データ（データバージョン 2022.05）」とされるものを利用した。この3種類を選択したのは、学習者の母語に比較的ばらつきがあるようにするためである。

この3種類のデータに対して、「中納言 2.7.2」で用意されている短単位検索で、

- (5) a 動詞／形容詞＋名詞
- b 動詞／形容詞＋助動詞＋名詞

という形態素列になる用例を取り出したものをいわゆる正用資料とし、

- (6) a 動詞／形容詞＋の＋名詞
- b 動詞／形容詞＋助動詞＋の＋名詞

という列になる用例を取り出したものをいわゆる誤用資料とした。なお抽出は母語が日本語ではない学習者のみとした。

なお本稿ではいわゆる形容動詞（形状詞）は調査対象としなかった。形容動詞についても

- (7) 一番好きなの漫画は学園物語。

のような形式が起こりうるが、過剰挿入とみなしうる「の」の位置に「な」が出現する以下のような例がある。

- (8) a 人がいっぱいいるな感じで、
- b 先生は面白いな方ですから、

---

(4) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> (2023年8月20日最終確認)

こうした例を考えると、「な」と「の」の間の整理は動詞や形容詞とは同列にはあつかえないと思われるので、本稿の調査対象とはしなかった。

以上の手順で資料を抽出することは、以下のことを含意する。すなわち、本稿であつかう資料における名詞修飾構造が、日本語文法で「関係節（連体節）」と呼ばれるもののほかに、やはり日本語文法で「補足節」あるいは「時間節」などと呼称される従属節<sup>(5)</sup>もふくむことである。これは、Comrie が、「アジア型」関係節という概念で関係節とその他の名詞修飾構文が同じ構造を持つことを指摘しているのに一致する<sup>(6)</sup>。

一般的な日本語文法記述において関係節とは別に補足節およびトキ節と呼称される以下のような例も、形態的には関係節と同様に述語要素が名詞を修飾している。

- (9) a 料理を作ることがとても上手だ。  
b 料理を作るとき、急がないようにする。

これらの例の「こと」および「とき」は、品詞としては名詞であるから、名詞修飾的な構造をもっている。そして本稿で問題とする過剰な「の」の用例は、これらの例でも出現する。

- (10) a 料理を作るのことがとても上手だ。  
b 料理を作るの時、急がないようにする。

よって本稿では、補文であれ副詞節であれ、(9)例のように名詞に対して動詞や形容詞が名詞修飾的な掛かり方をしているものを、すべて用例としてカウントする。そのために本稿では「関係節」ではなく、「名詞修飾構造」という呼称を使用するが、それは Matsumoto ほか (2017) で使用される「Noun-Modifying Clause Constructions」に基づく用語であり、いわゆる補足節やトキ節なども含み、さらに以下の(11)のような例も、単純な形容詞または動詞 1 語による名詞修飾であるが、過剰な「の」挿入を起こしているので、すべて「名詞修飾構造」に含む。

- (11) a 怖い話  
b 座るのところ

さらに、(5)および(6)に示した検索では、口語での言い直しなどの理由によって、正しい名詞修飾構造にはなっていない用例も抽出される可能性がある。検索結果全データを対象にして、これらを除外することは特に正用については数量的に多量であり難しい。よって機械的な検索結

(5) 日本語記述文法研究会 (2008) など。

(6) Comrie (1996, 1998, 2010)、および Matsumoto ほか (2017)、Whitman (2015)などを参照。

果データからランダムに700例を抽出し、それらについて名詞を修飾している構造であるかどうかを判断し、そこで得られた比率を検索結果総数に掛けた数値を、正用の用例数とした。700例における妥当発話例比率からの計算によるものなので、あくまで推測した正用数である。一方で「の」の過剰挿入については検索した結果全てを確認した。なお、(4)および(5)の検索形態素列以外でも実際には名詞修飾構造を構成している用例もあるが、それらは今回の調査では取り入れなかった<sup>(7)</sup>。

以下が、その検索によって求められた用例数である。

(12) 検索結果の用例数

検索パターン		用例総数	内訳		
			動詞	形容詞	助動詞
正用	動詞／形容詞＋名詞	13236*	6978*	6258*	—
	動詞／形容詞＋助動詞＋名詞	6323*	5623*	232*	468*
誤用	動詞／形容詞＋の＋名詞	711	284	427	—
	動詞／形容詞＋助動詞＋の＋名詞	152	122	9	21

なおこのうち右肩に「\*」マークを付した数値は、上述した推測用例数であり、以下の表でも同様である。またこの表内でも以下の議論でも、便宜上から「の」の過剰挿入を「誤用」と表現する場合がある。中間言語体系からいえば、「誤用」という用語使用は望ましいわけではないが、議論を簡潔にするために、本稿では必要に応じて「誤用」を用語として議論を進める。

この表からは、今回の調査ではおおよそ全用例に対して4%程度の用例に過剰な「の」挿入がみとめられたことになる。比率的にそれほど多いわけではないが、学習者の中間言語を形成するという意味で一定の体系的な出現があると認められる<sup>(8)</sup>。

## 4 日本語の名詞修飾と時制辞

本節では、名詞修飾構造を考えるために必要な動詞の活用形の問題と、それにかかわる時制の問題を見ておく。

日本語も基本的には時制をもち、言語普遍的に以下の構造をもつと考えられる。

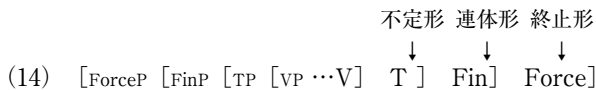
(7) 検索上で「名詞」の直前が「読点などの記号」となる発話には、たとえば「緊張していますの、行儀は全然できなくて」のように連体修飾を構成している例がある。しかし用例としてはそれほど多量にはならないだろうと思われること、および正用例についても同様に記号を含むものまでを抽出する場合の困難さを考えて、今回の調査からは外した。

(8) なお念のために、今回の調査でも中国語母語話者による「の」の過剰挿入は全体の35%程度であり、正用例数ももともと中国語母語話者は24%を占めていることを考え合わせると、特に中国語母語話者に特有の誤用とは言えないことを指摘しておく。

## (13) [CP [TP [VP…V] T] C]

ここで「T」および「C」は、それぞれ時制辞および補文辞である。ただし論者は、形態的な「-(r)u / -ta」は直接的な過去と非過去を意味する時制辞の形態ではないと考える。以下そのことを簡単に見ていくが、詳細は別稿を参照されたい<sup>(9)</sup>。

三原（2012）は、日本語動詞の活用を TP および CP 階層という句構造の中に認定する。本稿の議論に必要な部分だけを抜き出して示すと、三原の提案する構造は以下のようになる<sup>(10)</sup>。



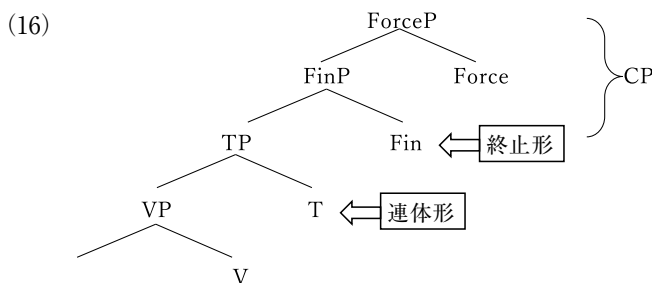
これを三原は、

- (15) (V が) T 位置まで動詞移動し、定形テンスを伴わない「-(r)u」(あるいは「-ta」)が付加するものが不定形である。なお T 位置では「る」(または「た」)という形式のみが顕現し、これに定形テンス性を付与するのは Fin である。そして V-T が Fin 位置まで動詞移動し、定形テンス性を帯びるものが連体形、V-T-Fin が Force 位置まで動詞移動し、(中略)終止形である。

と説明する。

本稿も、T 位置での動詞は「-(r)u / -ta」形式はもつが、テンス性はないと考える。ただし名詞修飾構造内の動詞が連体形であることを考えると、三原は(14)の構造のうち T 位置の動詞を「不定形」とするが、本稿はこれを連体形であると考えたい。これによって Murasugi (1991)の主張する日本語の関係節が TP であるという分析と整合させうるからである。

よって本稿では句構造中の各活用形を以下のように想定する。



(9) Yasui (2022)、安井美代子・浅山佳郎 (2022)、および安井美代子・浅山佳郎 (2021)。

(10) 三原健一 (2012) : 118、以下の引用(15)も同様。



これは以下のような考えによる。

T 位置に移動した動詞は、たとえば「渡す／渡した」のような「-(r)u／-ta」形式をもつ。このとき「渡した」のような「-ta」形式を完了形、「渡す」のような「-(r)u」形式を未完了形と呼称しておく。さて、日本語における Fin 位置にはいわゆるモダリティが置かれる。モダリティは本性上で「発話時点における話者の主観」と定義される<sup>(11)</sup>。この Fin = モダリティのもつ発話現在によって T 位置にある V が、完了形の場合には発話現在以前の完了である過去と解釈され、非完了形の場合には非過去と解釈される<sup>(12)</sup>。

これが解釈による時制である。すなわち時制は時制辞という形態が担うのではなく、後続する Fin 要素が発話現在という特性をもつために、それとの関係において解釈的に付与される。この解釈的な時制という概念は、日本語の関係節の時制として「相対時制」が主張されることと機能的には一致し、主節と従属節とで異なる時制メカニズムを設定する必要がない点で有効性が高い<sup>(13)</sup>。

この T 位置の動詞が連体形として名詞修飾構造を構成しているとする根拠は、以下のような考えである。日本語の関係節内部のモダリティには制限があることが知られている。とくに確定性を示す表現以外のモダリティは、以下のように出現しにくい<sup>(14)</sup>。

- (17) a \*太郎が来るそうなパーティ  
b \*その太郎が読んだだろう本

このことは、モダリティを Fin であるとするなら、関係節内部に Fin が位置しにくいことを意味する。すなわち関係節は、かならず TP ではありうるが、モダリティ表現を一律に Fin とする限り、FinP が関係節内部に安定的に存在するとはしにくい。

また、以下の例の「はず (だ)」などのように、関係節内部にモダリティが出現しているように見える例もあるが、これが真正のモダリティであるかには疑念が残る。

- (18) お昼に食べるはずの弁当を朝から家に置き忘れていた。

この発話を夕方になされたものであると仮定するなら、「はず (だ)」が真正のモダリティである

(11) 中右実 (1994) : 42-44

(12) このアイデア自体は国広哲弥氏の口頭での教示による。氏は、完了は発話現在による語用論の原則として過去に解釈されることをしばしば主張された。

(13) 庵功雄 (2001) : 149-150、寺村秀夫 (1984) : 195-196。なお論者は、「相対時制」という概念は、時制が発話現在に対する事態生起の時点をいうものであるという定義から言えば「時制」ではないという点で、本質的な問題を抱えるものであると考える。

(14) 三原 (1995) はこれを「事態の確定性制約」として指摘する。また日本語記述文法研究会 (2008) : 60-64 も参照のこと。

発話者の発話現在での推量としても、「食べる」が夕方以降の未来を指すことによって意味的に矛盾する。あるいは発話者ではなく「食べる」行為者の主観を記述する表現だとするなら、それは本来的なモダリティの定義に外れる。その意味でこうした「はず（だ）」は典型的な Fin 位置にあるモダリティとは言えない。

よって本稿は、T 位置に移動した段階での動詞が連体形であり、Fin は連体形の外側にあると考える。なお本稿では紙幅の関係上からこれ以上はこの問題を取りあつかわないが、関係節内部には、「かもしれない」や「にちがいない」といった表現が出現しうることを考えると、いわゆるモダリティに複数の階層がある、あるいは Fin がさらに下部階層をもつ可能性があり、ここで提案した句構造中の活用形についてはさらに分析が必要であろうと考えるが、ここではこれ以上の議論に立ち入らない。

いずれにしろ、以上の議論からは、たとえば「太郎が渡す本」という名詞修飾は以下のような構造を持つことになる。

- (19) [NP [TP [VP 太郎に渡す] T] 本]

ここで「渡す」は、抽象的な範疇としての T と結合して形成される形式であるが、定形であって未完了の意味はもつものの、発話現在と関連付けられるという意味での Fin による解釈的な時制はもたない。本稿はその意味で、名詞修飾構造を形成する TP 内の述語は、その形態上は時制をもたない定形述語であると考ええる。

## 5 時制を確保するための「の」

これ以降、学習者の日本語における過剰な「の」挿入現象を議論する。

まず、単純に名詞修飾構造末尾の「の」とその直前の述語要素の形態の分布を観察し、そこから「の」の文法的解釈を考える。以下の表は、名詞修飾構造の述語末尾が完了形となっているか非完了形となっているかという分布を見たものである。なお完了形とは、既述したように「食べた、うれしかった」のように「た」で終了する形式、未完了形とは「食べる、うれしい」のように末尾に「た」を含まない形式である。

- (20) 学習者の名詞修飾における述語形式の分布

	正用数	「の」誤用数	誤用比率
動詞の未完了形	7438*	323	4.2%
動詞の完了形	4611*	74	1.6%
形容詞の未完了形	7232*	457	5.9%
形容詞の完了形	278*	10	3.5%

(21) 少ない ←————→ 多い  
動詞の完了形    形容詞の完了形    動詞の非完了形    形容詞の非完了形

といった用例は総数が278例と比較的少数にとどまるので、考慮に入れないとすると、「の」による誤用は、完了形の「た」が出現する場合の1.6%よりも、非完了形の場合は2倍～3.5倍程度多いことになる。

(23)	非完了形	わたし	watas-u
	完了形	わたした	watas-i-ta
(24)	非完了形	こわい	kowa-i
	完了形	こわかった	kowa-kat-ta

上述したように日本語の活用形として連体形は定形ではあるが、本来的には形態的な時制をも

たない。しかしあくまで名詞修飾構造は TP またはそれ以上の句構造でなければならない。このある意味で日本語のもつ時制にかかわる構造的な脆弱性、すなわち時制が形態的に固有の接辞に顕現しないことが学習者の中間言語文法に形態構造的な不安定さをもたらす。このとき、「の」が、動詞または形容詞の「擬制的な語幹（実際は活用した定形である）」に付与されて名詞修飾構造としての定性＝時制解釈を獲得するという処理がなされるというのが、学習者による過剰な「の」挿入である。

以下に学習者の発話例を用例が比較的多いカ行五段動詞で例示する<sup>(15)</sup>。カ行五段動詞の非完了形用例は、正用と誤用を合わせて 109 例あるが、そのうち誤用は 38 例ある。以下のような発話である。

- (25) a たぶん描くのが先生が一番好きだった。  
 b 私の働くの時間は、1 週間です。  
 c 学校へ行くの人は、たくさんいます。  
 d あるいは、ドアを叩くの声、ちょっとわからないです。  
 e でも、聞くの練習は、1 人 C D を練習します

これに対して完了形は正用と誤用を合わせて 63 例であるが、以下の(26)の 3 例だけが誤用となる「の」の過剰挿入であり、それ以外は(27)のような正用例である。

- (26) a 私は、彼女書いたのキャラクターのフィギュア作りたいです。  
 b 最初、気づいたのことは、その橋の所で…。  
 c 前行ったの山の景色を書いているみたいです。  
 (27) a ケンは外に置いた梯子で 2 階に行きたがります。  
 b 親戚たちとか海に行った人たち、私を探しに行ったんです。  
 c アメリカの方が書いた本なんですけど。

ここで述べる時制解釈を安定化させるための「の」挿入という主張を支持する補助的なデータを以下に示す。第 1 に非完了形ではあっても、いわゆる一段動詞は固有の音形である「る」が以下のように出現する。

- (28) 非完了形 たべる tabe-ru  
 完了形 たべた tabe-ta

(15) カ行五段動詞は、無作為に抽出した正用 1038 例中において 131 例を占め、誤用例 397 例中において 41 例を占める。

このことは、一段動詞では五段動詞よりも過剰な「の」の挿入が少ないはずであるという予測を生む。「る／た」対立をもつカ変動詞とサ変動詞も加え、五段動詞とそれ以外で正用数と誤用数を比較したものが以下の表(29)である。なおここでは単純に動詞だけで終了している用例のみを取り上げた。

(29) 未完了形の動詞の活用の種類と「の」誤用

	正用	の誤用	誤用比率
五段動詞	3422*	177	4.9%
それ以外	3556*	107	2.9%

この表からは、五段動詞の誤用が、末尾に「る」を持つそれ以外の一段動詞などの誤用より多くを占めていることが見える。この分布は、統計的な検定でも1%水準で有意である<sup>(16)</sup>。

このことは、動詞の形態的な末尾形式に連体形の固有の音形がある場合より、それがいない場合の方に「の」の過剰挿入が起きていることを示す。そのことは節がTP以上の句構造レベルにあるべきことを考えれば、TPでありうるような時制解釈を可能とするかどうかという問題であると解釈されうる。「の」はその意味でTPとしての固有の形式を補助する機能を学習者の中間言語文法体系の中で与えられていることになる。

第2に、名詞修飾節内の格名詞の分布データもこの解釈を肯定するものである。一般的に節内の主格名詞は時制辞によって格が認可されるとされる。日本語では「ガ格」が主格に相当すると仮定できるが、それが存在することは、その名詞句を支配する述語動詞が時制をもっていることを前提とする。

以下の表(30)はその観点から、「の」誤用とガ格との関係を示すものである。なおこの表で正用の数値としたものは、機械的な検索結果から名詞修飾構造を確認するために抽出した用例である。

(30) 「の」の過剰挿入と格名詞との関係

	正用	の誤用	誤用比率
ガ格	175*	86	33%
それ以外	718*	220	23%

この表からは、ガ格をもつ名詞句がある場合に「の」の過剰挿入が有意味に多くなっていることが示される。前述したように主格の存在が時制の存在を前提とすれば、主格としてのガ格を表示するためには時制辞が必要となり、それを実現するために「の」が挿入されたと理解すること

(16)  $\chi^2$  検定ではP値が0.000011である。

が可能である。なお出現する名詞の意味役割と「の」の過剰挿入殿とは有意な関係をもたない<sup>(17)</sup>。

こうしたデータの分布上の傾向は、「の」の過剰挿入が、名詞を修飾する述語の形態と関係があることを示していた。そして当該の形態であるいわゆる連体形が、句構造上の活用形としては、固有の時制を持たないまま定形として TP を形成しうる T 位置にあるという知見から見れば、そうした日本語の時制表示が脆弱であると学習者に把握され、それを補完する手段として使用されたのが「の」の過剰挿入であると解釈することが可能となる。

ただし「の」自体が時制辞であるのではなく、前述したように日本語の時制が Fin 辞によって解釈的に付与されるとするなら、この「の」の文法的な位置は、時制が不安定な連体形に明確な時制解釈を与えるための Fin 辞の機能をもつ要素であるとするのが妥当だと思われる。その意味では補文辞句の主要部としての C の機能を持つ要素であるという Murasugi の主張に一致する現象だと思われる。

## 6 Force を中和するための「の」

前節では時制とかかわるレベルで機能したと思われる「の」の過剰挿入を見たが、「の」は、比較的安定的であるはずの完了形の後ろにも、以下のように出現する。

(31) 大きな家の中で殺してしまったの人がいます。

このことは、「の」の過剰挿入が前節で見たような時制解釈の安定化だけでは説明しきれないことを意味する。学習者にとって時制解釈を可能にする定形の「た」が出現しているにもかかわらず、上掲した(31)例では「の」が挿入されているからである。

「た」が学習者にとって明示的な時制要素であるとして、さらにもし「た」のような T 要素の後部にあらためて「の」が出現するなら、この「の」は明らかに TP より上位に位置せねばならず、それは CP 階層内に位置するということになる。そうすると CP 階層のどこになるかが問題となる。

この問題を考えるための現象となるのが、いわゆるウチの関係節とソトの関係節における「の」の過剰挿入の分布差である。以下はそれを示す表である。なお正用の数値は推測数で、誤用比率はそれに基づく「の」誤用の出現比率である。またこの表では補足節と時間節を分離し、それぞれ「コト」と「トキ」という略称で示してある。

(17) 主格かそれ以外かと「の」の過剰挿入の相関関係は、 $\chi^2$  検定で P 値が 0.00186 と、1%水準で有意となるが、意味役割動作主との相関は P 値が 0.685 と有意を示さない。

(32) 種類別連体節におけるの誤用の分布

	正用	の誤用	誤用比率
ウチ	3817*	126	3%
ソト	1517*	135	8%
コト	3536*	58	2%
トキ	3731*	87	2%

この表(32)は、いわゆるソトの関係となる名詞修飾構造において「の」の過剰挿入が多くなっていることをしめす<sup>(18)</sup>。「の」が過剰挿入されたソトの関係の修飾表現は以下のようなものである。

- (33) a 一緒に食べたり、パーティするの感じです。  
b あるいはドアを叩くの声、ちょっとわからないです  
c 実は私は、この仕事するの目的がよくわかりません。  
d お金を使うの機会がありません。

ところで、ウチの名詞修飾構造については、2つの考え方がある。

(34) 太郎が( )読んだ本

この例で言えば、ひとつは、( )位置に本来無形の代名詞 pro があるという分析でありもうひとつは、( )位置にあった「本」が移動したという分析である<sup>(19)</sup>。本稿では以下のような理由で、後者の移動という分析を採用する。

ウチの名詞修飾節の空位置が移動の痕跡であるとするなら、その名詞修飾節は移動した主要部名詞をふくめて完結したひとつの節であったことになる。一方ソトの名詞修飾節にとって主要部名詞は本来その節自体には存在しない外側のものであり、主要部名詞を含めない修飾節自体で完結しているはずである。

そうだとすると、ウチの名詞修飾節は主要部名詞と修飾節の間への別要素の割り込みを簡単には許さず、一方ソトの名詞修飾節はそれを許すだろうと予測される。たとえば名詞修飾節それ自体を指示的にうける「その」の挿入は、ソトでは安定であろうが、ウチでは不安定になるはずである。以下は(35a)例がソトの関係、(35b)がウチの関係の例文である。

(18) 誤用例および抽出して確認した正用例だけを対象に、補足節と時間節を除外したウチの修飾とソトの修飾についてみた統計的検定では、P 値が 0.000000000069 となり、1% 水準で有意である。

(19) 議論の簡潔なまとめとしては Whitman (2015) ; 191-194 を参照。

- (35) a 太郎がパーティに遅れた理由は渋滞だ。  
b 太郎が好んだコーヒーはブラックだ。

それぞれの主要部名詞の直前に、修飾節を指示的にうける「その」を挿入してみると、以下のとおりである、

- (36) a 太郎がパーティに遅れたその理由は渋滞だ。  
b \*太郎が好んだそのコーヒーはブラックだ。

「その」を挿入した(36)例文を、「その」の前で区切らずに一息で発話した場合、ソトの関係の(36a)の例文は、ほぼ(35a)例文と同義に解釈されうるが、ウチの(36b)は非文になるかまたは(35b)とは異なる意味に解釈される。

先に(33)として引いた学習者の「の」の過剰挿入の例文について、如上の「その」挿入を行っても同様であり、すべてほぼ同義で解釈しうる。

- (37) a 一緒に食べたり、パーティするその感じですよ。  
b あるいはドアを叩くその声、ちょっとわからないです  
c 実は私は、この仕事するその目的がよくわかりません。  
d お金を使うその機会がありません。

一方学習者によるウチの関係の発話は、たとえば以下の(38)のような用例であるが、これに「その」を挿入した(39)はすべて非文か不安定な文となる

- (38) a バスケットの中にあるのサンドイッチはもう食べられてしまいました。  
b 私が作るの料理はまずいです。  
c でも最高愛してるの人はやっぱり、主人さん。  
d タオイェンは、学校がたくさんいますの町です  
(39) a?? バスケットの中にあるそのサンドイッチはもう食べられてしまいました。  
b?? 私が作るその料理はまずいです。  
c \*でも最高愛してるその人はやっぱり、主人さん。  
d \*タオイェンは、学校がたくさんいますその町です

また、モダリティ辞としては相対的に上位にあると考えられる「のだ」は通常の名詞修飾構造には以下のように出現できない。



(40) \*太郎が読んだ のだ／のな 本

一方でソトの名詞修飾には「という」挿入が起こることがよく知られているが、「という」を挿入する場合には、以下の例のように、「のだ」も加えることが可能である。

(41) 太郎がパーティに遅れたのだという報告

しかしウチの関係では、「という」を介在させた「のだ」は不安定となる。

(42) ? 太郎が読んだのだという本

以上の分析は、ソトの名詞修飾節が、TP ではなく CP であることを示唆する。そして学習者の「の」挿入がソトの名詞修飾構造に多いということは、より完結性が高い CP の場合にそれが起きていると解釈することが可能となる。そしてそのことは、ソトの関係などにおいて過剰挿入された「の」の位置が節としての構造上における CP 階層の上位にあることを意味する。

すなわち前節で見たような時制解釈の安定化のための「の」は、そのために T のすぐ上でなければならないので、結果的に CP の中でも相対的に下位にある Fin のさらに最下位にあることになる。日本語の CP 階層についてはまだ明らかになっていないところが多いが、一般的には Fin の上位には Topic や Focus が置かれると想定されている<sup>(20)</sup>。「の」には Topic や Focus の機能を想定しにくいので、それらの主要部ではないとするなら、「の」の位置は、さらに上位の Force 階層が想定される。

これは言うならば、「の」が一種の Force 辞であるという解釈である。Force 辞であるということは、定義上 CP の最上位の主要部ということになる。

本稿で支持する Murasugi の分析が正しいとすれば、従属節たる名詞修飾節は TP であって、本来的にそこに Force はない。一方で主節は、定義上からすべて Force 句であることが求められる。それは以下のような断定の平叙文でも同様である。

(43) 太郎が本を読んだ。

この例文にも Force 辞が必要となるので、その構造は以下のように想定される。なお以下では前節で議論した Fin 辞と FinP については省略してある。

(44) [ForceP [TP 太郎が [VP 本を読ん] T だ] Force $\phi$ ]

---

(20) Rizzi (1997) ; 297

ここで問題となるのは、Force 辞が無形であるということである。この(44)が名詞修飾節を形成する場合、母語話者文法としては、(44)にあった Force は実現されず、以下のように TP だけとなる。

(45) [NP [TP 太郎が [VP *ti* 読ん] T だ] N 本 *i*]

しかし学習者にとって、主節の(44)において無形として存在していた Force 辞が、名詞修飾節の(45)においては存在しないと理解することは、それほどやさしいことではない。すなわち、主節であるなら断定の平叙文となる節が名詞修飾節を形成する場合、主節には存在していた無形の Force 辞が欠如しているという「ないものがない」状態となるからである。「ないものがない」ことは認識されにくい。

学習者の中間言語文法体系として、「ないものがない」という認識がもし形成されていないとすると、名詞修飾節である(45)の表面的な動詞の形式は主節である(44)の表面的な動詞形式と同一であるので、以下のような構造をしているという把握が起こりうる。

(46) [NP [ForceP [TP 太郎が [VP *ti* 読ん] T だ] Force $\phi$ ] N 本 *i*]

このとき、学習者の文法として(46)に存在している無形の Force は、主節の場合と同様の断定の平叙を形成する Force である。しかし当該の節は断定平叙を機能とする主節ではなく名詞修飾節でなければならない。

よって、そこに主節ではないという意味で、主節レベルにありうる断定平叙の Force を中立化させるための別の処理が必要となる。そこに Force 辞として有形であり、かつ主節ではなく従属節として機能する要素が出現する機序が成立する。そこで選択されるのが「の」である。文体的なマーカーである終助詞の「の」を除外すれば、「の」は、格助詞出自であれ、準体助詞出自であれ、モダリティの「のだ」を形成する nominalizer 出自であれ、いずれでも発話を終了させるという機能を持たない。それが主節レベルでの断定平叙という Force を中和させる力になると解釈することが可能である。

この処理を想定すると、完了形より後ろの比較的高い位置に出現する過剰な「の」を説明することが可能となる。そしてもしこの議論が正しいとするなら、有形の Force 辞のあるところには、「の」の過剰挿入が出現しやすいと予測される。

以下、それを確認する。まず誤った Force 辞が出現している名詞修飾構造を見ると、今回の調査では2例だけであるが、かならず「の」が過剰挿入されている。

- (47) a 地図を見たんですの時は、犬はバスケットの中にジャンプします。  
b 日本語を話しましょうのクラブがありました。

これらの用例から「の」を削除した「見たんです時」や「話しましょうクラブ」という表現は、本来的に誤用であるので、そうした形式を出現させるような母語話者のいわゆる「正しい」文法は一切機能しない。それなのに名詞修飾構造としては述語要素だけの形態に名詞が直接後接するという連体形に準ずる形式ではなく、過剰な「の」が挿入されている。これは名詞修飾構造には出現しない「のだ」や動詞の意志形を名詞に修飾させるために Force の変更を行った例と考えることができる。

また日本語の動詞にはいわゆる丁寧の「ます」を後接させることができる。「読む」に対する「読みます」の形式であるが、丁寧ということは聞き手へのもちかけという発話行為が働いていることになり、ここには明確な Force が存在する。以下は、「ます」が含まれる場合に「の」が出現している用例である。

- (48) a その車は、7 人が入れますの車です。  
b 知っていませんの人にもこんにちとはか言います。  
c バスケットに入れましたの弁当は犬に食べられました。

これを数値的にみると、以下のようになる。

(49) 「ます」と「の」の相関

	正用 (626 例中)	誤用 (167 例中)
ます + (の) + 名詞	1	11
ました + (の) + 名詞	3	7
ません + (の) + 名詞	0	7

この表では、正用例については、構造を確認するために機械的検索結果から無作為に抽出した 626 例中に当該の「動詞 + ます／ました／ません + 名詞」の形式がいくつ出現したかという数値である。一方誤用例の方は、すべての誤用例 167 例中に当該の「動詞 + ます／ました／ません + の + 名詞」がいくつ出現したかという数値である。正用例の方が無作為の抽出後の数値なので簡単に比較はできないが、それでも 600 以上の用例に対して、「ます」丁寧形に「の」が過剰挿入されない、つまり「の」という形式だけについては「正しい」例は 4 例に過ぎず、一方 167 の誤用例において動詞の「ます」丁寧形に「の」が過剰挿入されている例は 25 例となる。

この数値は、やはり明確な Force 辞が出現している場合には、それを中和するための疑似的な Force 辞である「の」が、CP の主要部として出現しているという本稿の主張を、間接的にではあるが支持するものである。

## 7 結論

本稿が主張するのは、日本語学習者の過剰な「の」挿入は、学習者の中間言語文法が日本語の名詞修飾構造を以下のように理解した場合に出現するということである。なおここで（ ）に入れた Fin 辞と Force 辞は、母語話者の文法としてはそこにあるべきではないが、学習者の中間言語における文法としてはあるべきと判断される要素である。また(50)の「(T)」を（ ）に入れてあるのは、非完了形としてT位置で実現されるべき定形という認識が明確でないことを意味する。

(50) [NP [FinP [TP … (T)] (Fin)] N]

(51) [NP [ForceP [TP …T] (Force)] N]

前者の(50)は、五段動詞や形容詞の非完了形のような時制辞欠如と見える場合に、時制解釈を安定化させるために「(T)」位置の後ろに、CP 階層上の低めの位置にある Fin 辞として「の」が挿入されるケースであり、結果的に以下の構造をとる。

(52) [NP [FinP [TP … (T)] の] N]

一方後者の(51)は、ソトの関係の名詞修飾構造に典型的に見えるもので、学習者によって日本語母語話者文法とは異なって CP であるべきと把握され、かつその「C」位置に CP 階層上で比較的上位の Force 辞が出現しているか、または無形のそれが出現していると把握された場合に、その Force を中和させるための別種の Force 辞として「の」が挿入されるケースである。結果的に以下の構造をとる。

(53) [NP [ForceP [TP … T] の] N]

以上の分析によって本稿は、Murasugi による過剰な「の」挿入は名詞修飾構造を CP とするための方策であるという提案を指示し、かつ成人の日本語学習者の発話においてこの方策が発動する条件を明らかにした。

### 参考文献

- 庵功雄. 2001. 『新しい日本語学入門』. スリーエーネットワーク  
 奥野由紀子. 2001. 「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察——縦断的な発話調査に基づいて——」. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部、文化教育開発関連領域 50；187-195

- 奥野由紀子. 2005. 『第二言語習得過程における言語転移の研究——日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に——』. 風間書房
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』. くろしお出版
- Comrie, Bernard. 1996. The Unity of Noun Modifying Clauses in Asian Languages. *Pan-Asiatic Linguistics: Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics*. January 8-10, Volume 3 : 1077-1088.
- Comrie, Bernard. 1998. Rethinking the Typology of Relative Clauses. *Language Design* 1 : 59-86
- Comrie, Bernard. 2010. Japanese and the Other Languages of the World,” *NINJAL Project Review* 1 : 29-45
- 小山悟. 2006. 「連体修飾構造の習得における『の』の過剰使用：格助詞仮説と準体助詞仮説」. 『九州大学留学生センター紀要』15 : 41-50
- 迫田久美子. 1999. 「第二言語学習者による『の』の付加に関する誤用」. 平成 8-10 年度科学研究費補助金研究成果報告『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』: 327-334
- 迫田久美子. 2002. 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 迫田久美子. 2020. 「I-JAS 誕生の経緯」. 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』. くろしお出版 : 2-13
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』. 大修館書店
- 日本語記述文法研究会（編）. 2008. 『現代日本語文法 6』. くろしお出版
- Whitman, Jhon. 2015. 「いわゆる『アジア関係節』について」. 深田智 西田光一 田村敏広（編）. 『言語研究の視座』開拓社 : 188-203
- Matsumoto, Yoshiko, Comrie, Bernard and Sells, Peter. 2017. *Noun-Modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia —Rethinking theoretical and geographical boundaries*. John Benjamins
- 三原健一. 1995. 「概言のムード表現と連体修飾節」. 仁田義雄（編）. 『複文の研究（下）』. くろしお出版 : 285-307
- 三原健一. 2012. 「活用形から見る日本語の条件節」. 三原健一 仁田義雄（編）. 『活用論の最前線』. くろしお出版 : 115-151
- Murasugi, Keiko. 1991. *Noun Phrases in Japanese and English : A study in Syntax, Learnability and Acquisition*. Ph.D. Dissertation, University of Connecticut
- 毛瑩. 2011. 「日本語の連体修飾句に関する習得研究概観」. 九州大学大学院比較社会文化研究科『比較社会文化研究』31 : 59-66
- Yasui, Miyoko. 2022. Temporal Interpretation and the Strong Minimalist Thesis. 『2018-21 科研費研究成果報告書：主節構造と意味解釈のインターフェース』: 5-26
- 安井美代子・浅山佳郎. 2021. 「日本語の時制解釈と現在時制形態素の有無について」. 日本語文法学会第 22 回大会予稿集
- 安井美代子・浅山佳郎. 2022. 「物語モードの時制解釈の日英中対象研究：談話表示理論の視点から」. 『2018-21 科研費研究成果報告書：主節構造と意味解釈のインターフェース』: 103-127
- Rizzi, Luigi. 1997. The first structure of the left periphery. Haegeman L. (ed.). *Elements of Grammar* : 281-331